

論壇

医師法第一条に想う

庄原市 右近文三

「医師は、医療及び保健指導を掌ることによって公衆衛生の向上及び増進に寄与し、もって国民の健康な生活を確保するものとする」

これが医師法第一条である。制定は、昭和二十三年七月三十日であるから、その当時、包括的医療(コンプリヘンシヴ・メディシン)の概念は無かったらうと思う。その後、数回改正されているが恐らく第一条は改められていないだろう。故勝沼晴雄東大教授によれば、包括的医療には、健康増進、疾病・災害予防、健康相談、健康診断、救急処置、疾病管理、臨床的診断、臨床的治療、後療法(リハビリテーション)の要素がある。保健指導も含まれると考えられるので、この第一条の文言は改めるべきであると思うが、医師が単に負傷疾病の直し屋

になつては医師法第一条の医師の使命を全うしたとは思えない。同じ負傷疾病にかからないように保健指導をしなければならぬ。

先日、某団体が「生活習慣病の予防健診を受けましょう」という立て看板を出していたので「健診」と「検診」の区別をいって注意したが、立てた元の官僚は、間違っていたとはいわない。

健診は、病人を作らないようにする、健康の保持増進を図る、という一次予防に主眼を置き、併せて二次健診を要するかどうかを定めるよすがとするものであり、生活習慣病とか、がん、結核等特定疾患の有無を検査診断するのは「検診」と書く。これは二次予防で、疾病の早期発見、早期治療に資するものである。ついでにいえば、負傷疾病によつて出て来た生活上

の障害をより軽くしようというのが三次予防で、一次は保健、二次は医療、三次は福祉で、この三機能の連携が重要である。

健診に当つては、既往歴、家族歴、自覚症状、嗜好品、運動、食餌に対する気くばり、通勤距離、通勤手段、所要時間、就寝時刻、起床時刻等、ライフスタイルを聴取して生活指導をせねばならない。ある事業場の定健と二次健診で胃かいようを指摘された人が居た。通勤距離は六、七〇〇メートルしかないのに自家用車を使っている。呼び出して尋ねてみると、仕事が忙しくて残業が多く朝寝をして、朝食は立つたままでかきこんで、歩いていては遅刻するので車を使っている、という。六カ月間残業禁止を勧告し、自後の処置は、主治医の意見によるとしたが、それ以後胃かいようの指摘は無くなった。ある事業場で、青白い顔のやせた老人が来た。その会社の社長さんで七二歳。治療中の疾病を見ると胃かいようがある。以下はその時の問答のあらましである。

「どのような養生をしていますか」

「医者通いをして、貰った薬をのんでいます」

「それは治療で養生ではない。養生とは、病気になるないように気をつけて、もし病気になるれば、一日も早く直すように自分で努力することです。努力するのでですから時には苦痛になることもあるでしょう。昼ごはんにどれ位時間をかけますか」

「六・七分でしょう」
「私は、一口、口に入れてからこはんでも三〇回以上かんで、ドロドロにしてから呑み込むので、胃が悪いと思ったことがない。よくかむと唾が出るから食事中にお茶を飲むことはない。お茶が欲しくなったら、かみようが足りないんだと思つて更にかむ。唾の中には大切な消化酵素があつて消化がよくなる。胃の病気の養生の第一歩はよくかむことです」と教えたが、翌年行った時は、「先生、胃かいようが良うなつて、体重も増えてきた」ということで、顔色も大分良

くなっていた。この人は酒、タバコはやらない人だった。

次は「健康な生活」について考えてみたい。

健康とはどういうことか。古くからいろいろな説が東西を問わず出されている。大衆向けに「めしうまい、かぜひかない、昼元気がよい、夜よく眠る」と四つの条件がかなえられていれば健康だ、としたわが国の高名な衛生学者がおられるが、その他時代と共に多くの説が出されていて、有名なのは一九四八年に出たWHOの憲章である。「健康は、身体的、精神的かつ社会的に完全に良好な状態にあることであって、たんに疾病または虚弱でないことではない」というのであるが、この「完全に良好な状態(コンプリート……ウェル・ビーイング)」とはどういうことかまだ定説がない、と聞いている。

健康の概念は、若年、中年、老年と年代と共に変わっていくであろうし、今でも専門家の間では議論されている。故武見日医会長は、遺伝的健康、形態的健康、機能的

健康(社会的健康を含む)を提唱された。これはWHOの憲章にも無い健康の継続的、集団的考え方で、それまでの健康観が現在の事象にのみ注目して考察されてきたという点でまことにユニークな考え方である、といわれた。

生活には、衣・食・住・労働・休養・心(精神的ストレス)・運動の七つの要素があると思う。健康なくしてまともな生活はないであろう。従って、少年期から成長期における健康と老年期における健康を考えるならば、健康の概念は決して簡単なものではない、とも武見会長は指摘されている。

「安全第一」といったのはヘンリー・フォード一世である。安全は企業にとっても個人にとっても生命であるが、「健康第一」とは言いえない。健康は企業にとっても個人にとっても財産であって、使い方によっては利子も生むが、減りもする。利子を生むような健康な生活を確保したいものであるが、年を取るとそうもいかない。

(〇〇・九・二)